

明治前期のわが国における都鄙関係に 関する二、三の予察的考察

大 嶽 幸 彦

はじめに

筆者は先に、日本人地理学者による都市・農村論の研究——特に農村地域からのアプローチ——に関して、若干の研究展望を試みたことがある¹⁾。また、実証的な研究では、兵庫県西脇市の例で都市・農村関係の観点から地域的基盤を究明し、アルザス農村の事例では都市・農村関係の歴史的变化を、土地所有・農業経営・工業化による農村変容の観点からそれぞれ分析した²⁾。従って、本稿は、筆者による一連の都市・農村関係に関する研究の一環をなし、しかも明治前期のわが国における都鄙関係について、二、三の問題点を整理したものであるが、それも以下のような三つの理由に基づいている。第1に、地域を都市・農村関係(都鄙関係)の立場から明らかにする場合、都市と農村との概念上の区別が形態上、人口構成、人口の相互移動、他の観点からみて、わが国ではあまりはつきりにくいことである。第2に、それにもかかわらず、第2次大戦後の人文地理学研究が、都市のみの研究⁴⁾、農村のみの研究に分化の一途をたどって来たこと、それゆえ日本での実証研究に基づき、かつ地域概念に関する原理的な考察不足を招来しがちであったことが挙げられよう。第3に、日本における地域概念の原理的考察を行なうためには、工業化・都市化の著しい今日よりも、例えば鉄道開通以前といった時期の地域を対象にした方が、問題を解明し易いという利点がある。

以下、明治前期のわが国における都鄙関係について、三つの点から若干の予察的考察を加えてみたのが本稿であり、項目の各々は先に述べた理由のそれ

それぞれに対応する。すなわち、都市・農村関係という概念のあいまいさ、地域概念に関する原理的考察の不足、鉄道開通以前の地域を取上げてみたい。

I 都市・農村関係という概念のあいまいさ

衆知の如く、ヨーロッパにおける都市と農村との形態上の区別は、集落の周囲を城壁で囲っているか、囲っていないかの点にあった。それに対し、わが国では、両者の外形上の違いはあまり無かったといつてよい。一つの例を挙げてみたい。「都市には外形上の障壁が無かった如く、人の心も久しく下に行通って、町作りは乃ち昔から、農村の事業の一つであった。どこの国でも村は都市人口の補給場、貯水池の如きものだと言はれて居るが、我々のやうに短い歳月の間に、是ほど沢山の大小雑駁の都会を、産んだり育てたりした農民も珍しいので、従って少々の出来そこなひ位は、適当の時に心付きさへすれば、先づ我慢をするより他は無いのである⁵⁾」。柳田国男が上記の事を述べたのは約50年前、昭和初期のことであったが、その頃の都市形成においても、都市と農村の区別が人口構成、人々の意識の上でもあいまいであったことがわかる。

また、いわゆる生粋の江戸っ子の少なさもよく知られている事実であるが、長年江戸っ子についての研究を続けてきた西山松之助は、次のように述べる。「このような他国者が、他国者として地方色が鮮明に生き続けているような江戸であったからこそ、江戸に住みつき、江戸言葉を話し、先祖代々の江戸の色や匂いを発散する人たちの、その色や匂いが18世

紀後半の明和ごろには、はっきりしてきて、他国者とはちがった人間模様がおのずから鮮明になった。それが江戸っ子である⁶⁾。また、柳田は、別の箇所でも次のように言う。「二つの大都市共に、所謂重立衆の家は段々に衰へて、之に代って立つ者も今は殆ど無くなった。市民の一小部分は僅かに二代三代前の移住者の子であり、他の多数は実は村民の町に居る者に過ぎなかつた⁷⁾」。行政上、市域に入り市民と呼ばれてはいても、生活実態、意識の上で農民である人々が大都市にさえ多いのは、今日でも変わりがない。景気のよい時は都会で働き、不景気になれば出身地の農村に帰り、糊口をしのぐ人々が多かつた事実も、都市と農村との結びつきを物語る反面、都市と農村との意識上での区別を、あいまいなものにさせる。

都市と農村との区別がはっきりしているといわれるドイツにおいても、市民と農民との人的交流が全く無かつたわけではない。『中心地研究』に引き続き、中心地論を体系づけた森川洋は、ドイツの地理学者、ペーター・シュラーの論文を参照しつつ、次のように説明する。「中世ドイツ都市では防禦施設と都市権・市場開設権をもつことが主要な特徴であつた。そして、都市は城壁によって周辺農村から截然と区分されてはいたが、その都市人口の半数以上は農耕市民であつた⁸⁾」。また西洋史学の立場から、「地域」に関して積極的な発言を続けている樺山紘一は、次のように述べている。「近年のドイツ史学の教えるところでは、都市と農村とは、いくつもの回路を通して、通絡し、共質性を維持してきた。たとえば、都市下層民、つまり市民権を付与されない居住民は、予想外に多数にのぼるが、彼らは農村における下層民と、共同の階層に所属する⁹⁾」。結局のところ、歴史学者、芳賀登の述べるように、「なしくずしにかわる日本の都市、それはオワイ車の列とアスファルトの道路、整備されない下水道、あれほど掘りかえして泥濘の都にしながらも、それだけはなくせなかつた。それは一つは都市と農村の関係を

示すものとはいえ、その限りでは日本農業、近郊農村の後進的農業の技術水準とかかわっている¹⁰⁾」という点こそ、かつての都市・農村関係を端的に説明するものの一つであろう。

II 地域概念に関する原理的考察の不足

本稿では、わが国における都鄙関係の実証的研究を問題にしているのだから、欧米の地域概念に関する理論的な諸研究や、それらの紹介ないし論議を中心にした論稿・著作等は本稿のテーマ設定から逸脱し、この際、考慮の外におく。つまり、第2次大戦後、わが国における科学研究の専門化、細分化の一般的風潮の中で、地理学研究者も、地理学の本質たる地域そのものの分析よりも、特定の事象のいわゆる地域的分析に向かいがちであつたこと、地域に関する原理的な考察を、若干の例を除いてあまり熱心に進めて来なかつた嫌いがありはしないかを指摘したいと思うのである。

さて、仮に歴史地理学とは過去の地理を明らかにすることである¹¹⁾という定義を認めたとしても、近世以前の過去を知るには、前もって現在と近接した過去、例えば幕末から明治前期の地理を明らかにしておかなければなるまい。それも、高野史男の述べるように、「やや時間の経過を置いた事象の方が大局的・原理的考察に好都合と考えるからである。このような観点からすると、現代日本を対象とする地理学的研究には、近世から現代への革命的転換期でもあり、現代の地理的事象の生起の直接的基盤をなしている江戸末期から明治前期の頃の考察は、きわめて重要なものである¹²⁾」という主張がなされているからである。また、高野が「地域には都市だけの地域、また農村だけの地域というものはありません。われわれは今日にしてようやくこの都市および農村の問題を真に地理学的に考察しうる段階に到達したとき¹³⁾えいえるのではないだろうか」と述べたのは、1950年代の終わりであつた。

しかし、その後の人文地理学研究の動向を振り返ると、高野の期待とは逆に、現実には地域そのものの分析よりも都市だけの研究、農村だけの研究にますます分化の一途をたどって来たといえないだろうか。しかも研究のテーマは、都市地理学においても農村地理学においても、特定の細かな事象の地域的分析という研究の専門化が進んでいる。これを今後も続けると、特定の事象という木のみを見て、地域という地理学の森を見ぬ式の研究になる恐れがある。というのも、「都市もけっしてにわかになんできたものでなく歴史をもっている。しかも現実においては領主その他の消費をあてにするものとともに、商人や職人の居住地域でもある。その意味で一個の地域概念ということができる。その上、都市は都市だけで成立するものは少ない。特に日本の都市は、都鄙二分することのできるものでなく、都鄙連体するものである¹⁴⁾」という批判も存在するからである。また、森川洋は、第2次大戦後のわが国における地方都市の地理学的研究の動向を分析し、次のように述べている。「現状分析は多いけれども、それらを法則化し理論化し、一般化へと高める努力は必ずしも十分とはいえないような気がする。都市の分析方法の開発についても何かもの足らぬように思える。そうした問題のなかでは、都市化のメカニズムを解明し、都市人口の増減を定量的に計る方法への接近がとくに重要な問題である¹⁵⁾」。都市地理学の若手研究者の研究方法に、計量地理的・理論地理的手法がふえてきた点を見れば、森川の予想は今のところ正しい。

しかしながら、これまで地域概念に関する実証的研究での原理的考察が、日本人地理学者に全く無かったわけではない。管見によれば、都市形成に関しては高野史男が、帯広市の例でチューーネンの孤立国をモデルに原理的考察を試みている¹⁶⁾し、農業地域の形成に関しては尾留川正平が、集落の性格構造と地域形成力との関連について概念図を描いた¹⁷⁾。また青木伸好は、大阪府下、泉佐野市の事例で、都市・農村

関係の立場から地域概念の再検討を試みている¹⁸⁾。筆者も明治中期の例で、都市・農村関係を模式的に図示したことがある¹⁹⁾。本稿は、さらに明治前期における地域概念に関し、鉄道開通以前の地域を例として、予察的考察を試みたものである。

III 鉄道開通以前の地域

鉄道開通以前の地域をつくりあげていたのは、マチとムラとの結びつき、マチとマチ、ムラとムラを結ぶ街道、河川であった。従って、地域も「かつて一つの川はそれ自体、河岸の場を転結して地域というより地帯をつくり、その部分だけ広域地域圏の結節部分とか結節、接続地域を形成したのである²⁰⁾」。黒崎千晴も、明治前期における中心地の階層的配置を検討する際に、河川流域を地域単位とした。それも、黒崎が河川流域を単位としたのは、明治前期において、これらの河川はともに内陸水運に活用されており、河口の各港と流域の諸中心地との間の水運こそ、商品流通を支持するものとみられるから²¹⁾であった。

最初から消費都市としての性格をもった城下町、参拝客目当てに発達した門前町を別にすると、農村地域の中で成立した都市の成長は、急激ではなかったといえる。ある都市は、村の定期市から常見世の店舗として都市らしくなっていたし、港町から発達した都市もあった。柳田国男によれば、「最初に少しずつ成長し始めたものは、津とか泊とかいふ海川の湊であった。昔の船は風を待ち、又悪い風の静まるのを待たねばならぬ。それ故にしばしば用の無い者がそこに落合って、常の日にも酒を飲み歌を口ずさみ、村では見られぬ新しい生活が始まったのである²²⁾」。もちろん、港町が都市に成長してゆくためには、単に風待ちの船客相手だけでは不十分で、商業資本が必要であるし、農村地域の中心たる都市の成立には、海港よりも河をいくらかさかのぼった河港の方が、都市と農村との結びつきを強めたことで

あろう。例えば、信濃川の水運（さらには日本海の海運）に関係して、信濃川河岸の河港に商業資本が蓄積され、その商業資本の支配下に、徐々に伝統的地場産業生産地としての発展をみたことが、地方都市成立の基盤とな²³⁾っている。

また、明治前期、日本の交通は、一部の鉄道開通以前の交通手段たる荷馬車や牛車が主であった。ということは、都市と農村を結ぶ範囲(都鄙圏)が、歩いて往復およそ1日の距離であったことを意味しよう。高取正男によれば、「かつての町や村は、いずれも街道によって、ていねいに結ばれていた。そのことが、町や村、地域ごとに独自の生活文化を育てる重要な条件になっていたが、その街道には表と裏の別があり、それぞれ役目がちがっていた。そのうち表街道で活躍したのは馬で、裏街道は牛が荷物を運²⁴⁾んでいた」。黒崎千晴も述べるように、荷馬車・牛車はともに、トラック交通普及化までの一段階における要具であり、その行動半径はきわめて局地的で、単位輸送能力も小規模であ²⁵⁾った。それゆえ、先に述べたように、1日の行程内で歩いて往復できる距離内に、都市(マチ)と農村(ムラ)の範囲が形成されていたことであろう。鉄道開通以前の都鄙圏に関しては、今後、具体的な資料・データを基に検証する必要がある。

む す び

以上の如く、本稿は、明治前期のわが国における都鄙関係(都市・農村関係)について、文献の上から二、三の問題を予察的に指摘したに止まり、データ分析・資料分析を主体とする実証的研究の立場を、今回は取っていない。それも、明治前期の都鄙関係を論証するに足る資料を筆者が十分手元に集めていないために他ならず、実証する必要がないと判断したためではない。今後、『共武政表』、『徴発物件一覧表』を始めとする各種のデータ・資料の蒐集・分析を推し進め、明治前期の都鄙関係に関し、実証的

な面から解明することが課題として残される。

(神戸大学教養部)

〔注および参考文献〕

- 1) 大嶽幸彦「日本人地理学者による都市・農村論の研究—特に農村地域からのアプローチに関して—」地理評53—9, 1980, 589~593頁
- 2) 大嶽幸彦「兵庫県西脇市における地域的基盤—都市・農村の関係を視点として—」(総合研究〔A〕研究成果報告書, 研究代表者, 高野史男『地方都市の成立および発展の地域的基盤に関する研究』, 1978), 45~50頁
- 3) 大嶽幸彦『アルザス農村の歴史地理学研究』大明堂, 1979
- 4) 例えば、都市・農村関係の研究は主に、都市地理学的研究の一環として行なわれてきた。ただ、その場合にも「都市圏研究として、地方都市の生活圏に示される都鄙関係が問題となった」。森川 洋「戦後わが国における地方都市の地理学的研究の動向について」史学研究118号, 1973, 1頁
- 5) 柳田国男「都市と農村」1929(『定本柳田国男集』第16巻, 筑摩書房, 1962), 249頁
- 6) 西山松之助『江戸っ子』江戸選書1, 吉川弘文館, 1980, 12頁
- 7) 前掲5) 242頁
- 8) 森川 洋『中心地論I』大明堂, 1980, 18頁
- 9) 樺山紘一『地域からの発想』日本経済新聞社, 1979, 202頁
- 10) 芳賀 登「地域概念の歴史的変遷」(大阪歴史学会・地方史研究協議会編『地域概念の変遷』雄山閣, 1975), 3頁
- 11) 菊地利夫『歴史地理学方法論』大明堂, 1977, 1頁
- 12) 高野史男「日本海沿海地域考」地域研究20—1, 1979, 6頁

- 13) 高野史男「大都市郊外論」(高野史男編著『都市形成の地理的基盤』大明堂, 1980), 23頁
- 14) 前掲 10) 20頁
- 15) 前掲 4) 7頁
- 16) 高野史男「北海道帯広市の都市形成」1964(前掲13)『都市形成の地理的基盤』, 50頁
- 17) 尾留川正平「秋田県子吉川流域における農業集落」1943(尾留川正平『農業地域形成の研究』, 二宮書店, 1979), 58頁
- 18) 青木伸好「都市・農村関係による地域概念の再検討」(織田武雄先生退官記念事業会編『人文地理学論叢』柳原書店, 1971), 53~63頁
- 19) 前掲 2)
- 20) 前掲10) 41頁
- 21) 黒崎千晴「明治前期における中心地の階層的配置について—秋田県を事例として—」1980(前掲13)『都市形成の地理的基盤』, 69頁
- 22) 前掲 5) 244頁
- 23) 高野史男編『地方都市の成立および発展の地理的基盤に関する研究』(昭和51・52年度総合研究〔A〕研究成果報告書), 1978, 2頁
- 24) 高取正男「庶民たちの裏街道」朝日新聞夕刊, 昭和55年5月12日
- 25) 黒崎千晴「地域内交通の変貌に関する一試論」歴史地理学紀要 8, 1966, 108頁